

時評

前山 亮吉 県立大 学 国際関係学部教授



選挙結果の一方的な評価は危うい。「自民勝利民主敗北」の静岡県議選評価は、丸いものを丸いと言つて過ぎない。「自民勝利」の吟味こそが、選挙分析の要である。

①幸運な過半数獲得
1人区での勝利、焼津・掛川

での議席独占が自民公認過半数35議席の決め手となった。しかし、僅差の選挙区が3つある。
伊東 803票差
牧之原・榛南 628票差
掛川 164票差
千票を切る差は運の領域であり、自民党は幸運に恵まれた。運を左右したのは投票率であ

県議選自民勝利の本質

る。掛川は前回無投票であったが、他の2選挙区は次のように低落した。

伊東 3・22%減
牧之原・榛南 5・79%減
県政史上最底の投票率こそが、自民党の組織力・地盤の効力を生み出した。前回並みの投票率ならば、幸運な勝利は保証

「勝利の方程式」が復活

できない。

②焼津+藤枝の自民票

焼津選挙区の自民党3議席独占は、志太地域における自民地盤の強力を再認識させた。

さて、自民党の票は増えたのだらうか。選挙区の一部が焼津に移った藤枝と合計して比較すると、面白い結果が出た(07年藤枝には自民系無所属へ今回自民公認も算入)。

07年焼津	27195票
07年藤枝	42820票
07年合計	70015票
11年焼津	39094票
11年藤枝	30920票
11年合計	70014票

09年総選挙敗北以来、自民党の再生が模索されてきた。今回の統一地方選挙で、自民党は全国的にも復調したが、党の再生とのつながりを見つけにくい。ただ、東日本大震災以後の自民党は政治休戦し、責任ある健全野党として政権に協力する立ち位置にある。

全国的な投票行動の中に、健全野党・自民党を

盤の底力であるが、それは票の固定化、悪く言えば伸びが鈍いともみなせる。

以上見たように自民勝利の本質は「低投票率+地盤・組織選挙」の「勝利の方程式」が復活した結果と言える。次の総選挙でも投票率が下がれば、自民党は勝つだらう。しかし、これは前向きの話ではなく、状況が変われば「勝利の方程式」は力を

失う。09年総選挙敗北以来、自民党の再生が模索されてきた。今回の統一地方選挙で、自民党は全国的にも復調したが、党の再生とのつながりを見つけにくい。ただ、東日本大震災以後の自民党は政治休戦し、責任ある健全野党として政権に協力する立ち位置にある。

本県でも古い型の勝利に満足するだけでは、展望はない。新たな意識に敏感に因應するべきである。4月26日に議員投票で県連人事を決めた試みは悪くないが、非公開は残念だ。

執筆者略歴

◇まえやま・りょうきち氏 学習院大学大学院修了。博士(政治学)。立教大助手・県立大准教授を経て2011年4月から現職。著書に本欄「時評」をまとめた「静岡の政治 日本の政治」(静新新書)など。